

「中絶・出産の社会的決定要因」

～レイプ被害者サポーターへのインタビュー調査から～

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター

どのような妊娠においてもその先には、妊娠の継続（出産）か妊娠の終結（中絶）のどちらかしかありえない。レイプによる妊娠の場合もまた同様に、妊娠を継続するのか終結するのか、被害者女性はその選択を余儀なく迫られる。しかし、この場合、レイプで妊娠した女性は一般的に中絶を希望するとされている。しかし、今回の修士論文では、レイプで妊娠をした女性が必ず中絶を希望しているのか、また、実際にレイプでの出産を実現しているケースは存在しないのか、などについて検討した。研究方法は、女性のために支援を行うサポーターへのインタビュー調査の実施である。インタビューの実施期間と場所は、養子縁組斡旋を行う W の会が 2004 年 1 月 22 日と 2004 年 8 月 19 日 W の会本部において実施、また、プロ・ライフもプロ・チョイスの思想ももたず望まない妊娠の電話相談を行っている American's Pregnancy Helpline（以下 APH と省略）という団体が 2004 年 4 月 27 日にテキサス州において実施、となっている。

第一章では、アメリカと日本でレイプによる中絶がどのような過程で許されるにいたったかを探り、第二章においては、歴史的に見ても一般的な中絶が認められない場合でさえ、強姦による妊娠は中絶を合法化すべきだと人々が考えてきたことを確認した。これらのことから、やはりレイプで妊娠した当事者が希望する選択とは中絶だと一般的に考えられていると言えるのではないだろうか。人々がなぜこのように考えるのかその理由については不明であるが、レイプで妊娠し中絶を希望しない女性は、われわれの推定に反するがゆえに奇異な存在だと考えられている。しかし、このような大勢の考えは偏見であり、この決めつけは妊娠を希望する女性の自己決定権を侵害することになっているのではないかと考えた。そこで、実態を把握するために、レイプによる妊娠を経験した女性に何らかのかたちで支援を提供しているサポーターへのインタビュー調査を実施した。

その結果、第三章アメリカの APH インタビュー調査からは、レイプによる妊娠であっても出産を希望する女性がいることが判明した。出産を希望する理由には、宗教と「赤ちゃんを殺したくない」という女性の思いが上位にあげられた。これは、気付いた時には手遅れであったから、などの消極的な理由とは違い、女性がそれを望むという積極的な理由であることが判明した。しかし同時に、アメリカにおいてさえもレイプによる出産が困難であることも事実であった。女性達は、レイプで妊娠した事実が周囲にばれると、家族や友人から中絶をすすめられるといった事情を抱えていた。そして、被害者女性が中絶を決定する理由にはまさにこのようなアメリカの事情が反映されていた。なぜなら、中絶を希望する 1 番の理由が「その事実を誰にも知られたくない」、2 番目が「家族や友人からのプレッシャーのため」となっていたからである。レイプによる中絶の決定は、加害者やその子

どもへ怒りが向くから、といったことが理由ではないかと筆者は予想していたが、レイプ被害者女性の産む・産まないの自己決定は、社会的要因によるものだということが明らかとなった。

また、第四章 W の会スタッフでのインタビューからは、レイプ被害者女性の希望を、出産か中絶かの二分法で分けようとする自体が困難であることがうかがえた。被害者女性が支援者に対して語りかける際の「中絶」と「産む」という言葉は、状況や文脈の中で矛盾しており、このことは性被害による混乱からと説明するだけでは不十分に感じられた。しかし、これについて明らかにするためには、今回のインタビュー調査では限界があった。したがって、今後引き続き調査を続けていく予定である。そしてまた、日本の W の会スタッフから、「女性は最初中絶したいと言って相談してくるが、子どもを育てなくてもよいとなることで中絶を回避する場合もある」ともわかった。つまり、W の会においてもまた、レイプによる妊娠で出産を実現している女性がいることが判明したのであった。

このように、双方の調査からは、あらゆる妊娠の中で最も望まれない妊娠だと考えられているであろうレイプでの妊娠でさえも出産を実現している女性が存在しており、レイプ被害による身体的・精神的な深い傷が、それによる妊娠の終結希望とは必ずしも結びつかないことが明らかとなった。したがって、レイプで妊娠した女性は中絶を希望する、といった一般通念は少し誤っていることが証明された。また、この場合に妊娠の継続を希望したとしても、産まれてきた子どもを育てることには困難を感じ、実際育児を回避する傾向にあることも、アメリカと日本の共通点として垣間見えた。

今回の調査結果からは、アメリカにおいても日本においても、支援や介入が行われた場合に被害者女性が出産を実現していることが明らかとなった。つまり、このような受け皿は、中絶を積極的に希望しない被害者女性の産む・産まないの自己決定において選択肢を増やすことになりえることが証明された。ただし、今回のこのような結果や考察は、レイプで妊娠した女性の中で、中絶か出産かに少しでも迷いを感じる女性のみが対象となった。なぜなら、中絶に迷いが全くない女性ならば APH や W の会に相談などしないからだ。しかし、レイプでの妊娠で、産む・産まないの選択に何ら迷いもなく中絶を決定する女性と、継続か終結かで何らかのためらいを感じた女性とでは（結果が中絶か出産であったかとは関係なく）、産む・産まないの決定要因に大きな違いがある可能性もある。たとえば、中絶に何らためらいの感じない女性にとっては、産育を切り離す選択肢の存在など全く無効かもしれない。この部分は今後の研究課題となってしまったが、あらゆる妊娠の中で最も望まれない妊娠だと考えられる「レイプでの妊娠」においてさえも出産を実現する場合があったという今回のこの調査結果により、望まない妊娠全般における出産・中絶の決定について再検討していくこともまた同時に、今後の課題となった。